

女性の対人援助職のケアの語り

亀井美弥子 (湘北短期大学)

キーワード: キャリア発達, 対人援助職, ケアの倫理

問題と目的

対人援助職が学習機会をどのように得て、職業的アイデンティティを獲得するのか、また、そのうえでどのように専門職としての自己アイデンティティやキャリアを發展させていくのかといった学習とアイデンティティ発達のプロセスを明らかにすることは、少子高齢化によって対人援助職の育成が求められる現在、急務であるといえる。この問題を考えるにあたり、特に「ケアの倫理」

(Gilligan, 1982) に注目したい。対人援助職のなかで多くの割合を占める女性は「ケアの倫理」を重んじることによって、自らの対人援助職へのモチベーションやアイデンティティを保っていると考えることができる。しかし一方で、自分自身の家族へのケア責任を重視し、仕事と家庭との間で拮抗関係生まれ、女性の対人援助職のキャリア発達や学習過程に影響を与えているのではないかと推測もできる。この観点からは「ケアの倫理」と学習のプロセスおよび職業的展望がどのように関連しているのか分析することは今後の女性対人援助職の職業発達を支えるにあたり、重要な観点となる可能性がある。

そこで本研究では「ケアの倫理」がどのように職業的な学習プロセスに職業的展望および実際のキャリア形成に関連しているのかを明らかにするため、女性の保育士・看護師に対してインタビューを行った。今回は予備的な分析として 2 名の研究協力者を対象にキャリアの流れを描くとともに、特に、家庭と仕事の場におけるケアの位置づけがどのように語られたかを検討する。

方 法

研究協力者 30 代看護師 1 名および 60 代元保育士 1 名。今後、より多くの対象者についての分析を行う際に多様な考え方や見方を得られる可能性を考えて、異なる職業の異なる年代の女性を対象とした。

手続き 2019 年 6 月、7 月に 1 時間から 1 時間半ほどの半構造化インタビューを調査協力者の自宅に出向いて行った。研究協力者には本研究の趣旨および個人情報の取り扱いや研究協力者が研究中断を自由に行えることなどを説明し同意を得た。質問内容は「就職の経緯と学び方」「仕事および家庭での喜びや大変なこと」「家庭と仕事それぞれについてのケアの対象者に対する思い」などである。インタビューの内容は録音・録画され、その書き起こしをもとに内容について検討した。

結果と考察

30 代看護師 公立の療育センターで働き始めたが、独特な職場のしきたりやコミュニケーションの難しさから半年ほどで退職し、別種の仕事でアルバイトを行った。しかし経済的見通しが立たないため、総合病院に再就職を行い、そのタイミングで結婚をした。インタビュー当時は第三子の育休期間中であつた。現在は外来でリーダー的の仕事をしていて、スムーズな診療を目指して、スタッフの気持ちをくみ取り、言葉のかけ方を工夫しながら適材適所に人を配置し上手く外来の流れを作ること、外来の患者さんとお話することにやりがいを感じている。家庭では子どもとの関わりが一番の楽しみで笑顔でいることを心がけている。家庭と仕事でのケアの位置づけについては「まったく別かもしれない」「病院では病院の顔、家では家の顔」「病院のほうは私ではない感じ」「絶対に患者さんには感情を出さない」。他の仕事でも仕事の間ではお客さんに対しては自分を出さないでいた。仕事でもややもやしたことがあったら、実母に電話してそれを聞いてもらうという。

60 代元保育士 幼児教育学科で資格は取ったが元々保育者になる気はなかった。人形劇部にいたことから人形劇団に就職、長く活動し、40 代でパート保育士として再就職後、正規職員になる。退職後は親を看取り自宅で週に数日子育て広場を開いている。保育所では子育て経験があっても保育とは違うということを実感し、ベテランの保育士を見ながら技術や行動を学んだ。家庭と仕事でのケアの位置づけについては「ああ全部一緒ですね」「ひとりじゃないよということを言いたい」それを感じたのは「保育園の小さい人たちと関わってきたこと」「苦しそうに育児をしている保護者とかかわり」「父と母の介護をしているときかもしれない」。

以上、二人の調査対象者は家庭と仕事におけるケアの位置づけについてまったく異なる回答をしていた。看護師は家庭と仕事でケア対象に対する態度を切り替えることで自分自身の仕事や家庭を有効に機能させていると語り、元保育士は人とかかわりという見方から、家庭や仕事でのケアの機能を統合して語っていた。

付 記

本研究は科学研究費補助金 (基盤研究 (C)、課題番号 17K04394) の助成により行われた。